

目次

巻頭文 福のり子	3
・基礎プロジェクト	9
鑑賞者ボランティアの構成	9
各グループ鑑賞作品の紹介	10
参与観察者によるレポート	17
研究員によるレポート	37
学生アンケート集計・分析	41
学生レポート抜粋	50
学生レポート全回答	67
・実践プロジェクト	153
学生活動編	153
[1]モネパズル in ARTZONE「みるみるうちに みるみるかわる?!」	
[2]京都3大学合同鑑賞サポーター養成プロジェクト	
[3]北野諒個展オープニングトーク	
[4]横浜美術館インターンレポート	
アート・コミュニケーション研究センター(ACC)活動編	165
[1]京都大学教員免許状更新講習「理科大好きな先生になる3日間」	
[2]本学主催教員免許状更新講習 「コミュニケーション・スキルアップの3日間!」	
[3]島根県教育委員会・松江市教育研究会研修	
[4]三重県立博物館ワークショップ	
[5]大阪府立港南造形高校連携授業	
[6]日本パプテスト病院看護学校特別講義	
[7]野の花診療所ホスピスボランティア養成講座	
[8]高知県立美術館連続レクチャー	
・卒業論文紹介	177
青山真樹「対話をもたらすもの ACOPにおける考察」	
・ACOP関連記事	202
・2010年度活動予定紹介	211
美術館調査「わたしたちがみた当世美術館事情」	
科学研究費基盤研究「コミュニケーションがつなぐ人とモノ」	



1	2
3	4
5	

1. モネパズル in ARTZONE
「みるみるうちに みるみるかわる?!」
(2009年6月14日)
2. 表現演習の一環として、本学院生・北野諒君の作品を用いたの ACOP
(2009年7月02日)
3. 京都大学総合博物館での古地図を用いた
ギャラリートーク (2009年9月13日)
4. 本学主催教員免許状更新講習
(2009年8月02日)
5. 本学での鑑賞者研究プロジェクト
グループ鑑賞会
(2009年11月22日, 12月6日, 20日)

巻頭文

福 のり子

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

(1) はじめに

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科では 2004 年度から、ACOP (Art Communication Project) と名づけた「対話を基本とした鑑賞教育プログラム」を行っている。本報告書は、1 回生の必修授業 (芸術表現演習) として年間を通して行われる ACOP と、この授業を受けた上級生の学内外での活動、および 2009 年度に本学に設立されたアート・コミュニケーション研究センター (ACC) の年間活動の記録である。

私たちは ACOP の目的として、以下の 4 つを挙げている。

- 1: アートとアート作品の違いを学ぶ。アートとは作品と鑑賞者の間におこる、不思議な現象、深淵ですばらしいコミュニケーションであることを理解する。
- 2: 学生ひとり一人が、作品との豊かなコミュニケーションを図ることのできる主体的な鑑賞者になる。
- 3: 将来アート界で働きたいと希望している学生たちに、鑑賞者の存在の重要性と、彼らの不安や不満、喜び、ニーズなどを把握してもらう。
- 4: 「作品」と「鑑賞者」の間に、より密接なコミュニケーションを確立するため、両者を結ぶナビゲーターの重要性を、実践を通して学ぶ。

文部科学省が「ことばの力」を唱え、また不況のあおりを受けて、美術館にとって来館者獲得が重要課題のひとつとなってきた昨今、コミュニケーションを基本とした ACOP のような鑑賞方法は大変注目されはじめています。日本の大学では初めて、そして唯一、年間を通じた必修授業として鑑賞教育プログラムを行っている私たちには、毎年様々な教育機関から講義やワークショップの要請をいただく。

ACOP は「コミュニケーションを介した作品鑑賞」である。と同時に、「作品鑑賞を介したコミュニケーション」でもある。この考えのもと、いわゆる美術作品とは限らないもの、例えば、古代生物や古地図の鑑賞会を実施したり、教師や看護学校の学生を対象に、コミュニケーション・スキルの上達を目的とした鑑賞会を開催したりもしている。こうして ACOP は当初私が想像していた以上にそのすそ野を広げ、様々な分野の人たちからも興味をもってもらえるようになった。

人が生存していくために最低必要なものが衣食住だとすれば、アートとは「生存」を、「生活」や「人生」のレベルに高めてくれるものだといえる。しかも、ART の語源は「生きる技術」。人が、人間として社会で生きていくために不可欠なコミュニケーションもまさしく ART なのだ。

様々なところで講義やワークショップを行っている、たくさんの質問をいただく。そのなかでも頻りにだされる質問を、ふたつ取り上げてみよう。ひとつめは、「ACOP では鑑賞者に作品にまつわる情報は与えないと聞くが、それでは勉強にならないのではないか？」という質問だ。

常日頃、私は学生に「知識より意識をもってみる」ことが大切だと教えている。知識はときに人の目をみえなくさせるからだ。あるとき、私の学生がナビゲーターをして、中学生を対象に鑑賞会を開

き、ゴッホが描いた《ヴィンセントの椅子》をみせた。画家の名前を教えずに鑑賞を始めると、中学生たちは自らの直感を大切に話しだし、しばらくするとそこに描かれた事柄や、事柄と事柄の関係性を様々な角度から考慮し始める。こうして鑑賞会は30分以上も続いた。

同じ中学校の別のクラスでは、「作者はゴッホです。」という情報を最初に与えて鑑賞会を始めた。すると、彼らは黄色い椅子の下に描かれた床の赤みがかかった色を、「血の跡」にしかみてくれなかった。そして、絵の中の様々な事柄を不吉なものに結びつけてしか考えられなかったのだ。なぜならば、彼らは「ゴッホは耳を切った」ということを以前から知っており、そのショッキングな出来事を中心にしか、この作品をみることができなかったからだ。

別の小学5年生を対象に鑑賞会を開いたときには、1作目に《ヴィンセントの椅子》、2作目には日本人画家の作品、そして3作目に同じくゴッホの《靴》をみせた。最後の作品をみている時、小学生から様々な意見がでた後、ナビゲイターは「どんな人がこの靴を履いていたのか想像してみましよう」と問いかけた。すると、それまで同級生の意見をじっと聞くだけで、一度も口を開かなかった男の子が手を挙げた。

「これを履いていた人は、あの黄色い椅子に座っていた人。」

もちろん、どの作品の作者名も伝えてはいない。「どうしてそう思ったの？」と再度尋ねると、彼は「両方ともお金持ちじゃなさそうだし、ものをとても大切にしているみたい。それに、とても寂しそう。」と答えてくれたのだ。この男の子は、2つの絵のなかに描かれた「視覚情報」を関連させ、体系的に鑑賞してくれたといえる。

ACOPで鑑賞している間に、情報をまったく与えないというのではない。情報の内容と与えるタイミングが大切なのだ。上記の小学生の男の子が発言した後、ナビゲイターはこう伝えた。「すごいね～。そのとおりだよ。両方ともゴッホという画家が描いた絵なんだ。」

情報を与える際に最も大切なことは、鑑賞者のなかにその情報を活用する準備が整っているかどうかである。つまり、情報伝授において鑑賞者は受け身ではなく、主体なのである。同時に、与えられた情報によって、鑑賞者が下記の3つの括弧のなかの言葉に表されるような思いを抱くことが大切だ。

- 1:「ホントにそうだ！」鑑賞者がすでに理解している事柄を、情報でより確かなものにする。
- 2:「お、こういう風に考えていっていいのね！」鑑賞者が、心のどこかで「そうじゃないかな」と思っていたことに対して情報を出す。
- 3:「え？ホント？」情報によって、鑑賞者にさらなる洞察と思考を促す。

こうして適切な情報を、適切なタイミングで与えられた鑑賞者は、納得し、勇気づけられ、安心して鑑賞作業を続けられる。しかも「3」の場合、鑑賞者は驚き、そしてチャレンジされてもいるから、より興味をもって鑑賞を続けることができる。

従来、教育とは「空っぽの壺に知識を注ぎ込む」ものだと思われてきた。このような考えのもとでは、なるべくたくさん知識の移転と定着が目指され、効果が上がったかどうかを調べるために試験が行われる。正解はひとつで、それを知っているのは常に教師だ。少なくとも、私はこのような教育を受けてきた。

しかし、私たちは決して「空っぽの壺」ではない。私たちの中には、すでに経験や情報が詰まっているからだ。壺の大きさも形も各自異なる。学びとは、知識の蓄積ではなく、外部から新たな刺激があったとき、それまでの自分の経験と照らし合わせて、それを精緻化し、さらに再構築していく過程だとすれば、情報や知識は、こうした学びが起こるための「発火材」として投げ込むことが重要なのである。

ふたつめの質問は、「結局はナビゲイターが答えを持っていて、それに導くように会話を操作するのではないか？」というものである。

ナビゲイターも鑑賞者のひとりである。だから、作品をみてナビゲイター自身が自分の考えを述べることはある。しかも、自分がナビゲイションをする作品を自らが選んだ場合、他の鑑賞者よりもその作品についてより深く考えており、その結果、既に作品となんらかの関係性を築いていることもある。ナビゲイターの、作品へのそういった思い入れが、鑑賞者を「操作」しているようにみえるのかもしれない。ACOPでは毎年、1年間の終わりに学生たちにアンケートをとる。そのアンケートのなかの「ナビゲイターにはなにが必要とされていますか？」という質問に対する学生たちの回答を紹介しよう。

- * ひとつの答えに固執しない。(中略:ナビゲイターが)自分の考えに固執しているうちは、鑑賞者がほっとらかしになってしまう。(P102)
- * 答えがあると思わないことが大切です。ナビゲイションのなかで何かの答えみたいなものを考えてしまっていることがよくありました。これは、考えることをやめてしまっているのと同じで、作品のなかに真実があって、それに対する批評家の考えや先生に言われたことが答えとってしまうことがあります、それは違うと思います。あくまで批評家や先生が言っていることは、その人たちがその作品をみて、思ったことや考えたことであって、自分が思っていることとは違うかもしれないし、はたまた、ほかの人がみたら全く違う意見を言うかもしれません。だからこそ、答えを決めつけたり、これがゴールだなんて思っはいけないと思います。ゴールなんて曖昧で不明確なものだから。(P109)

ゴールは曖昧で不明確だからこそ、別の言い方をすれば、ひとつの到達点だけを求めないからこそ、コミュニケーションは持続可能なのだ。別の学生は、こうも言っている。

- * 言葉を用いても完全な意思疎通を図ることはできないのです。だからこそ、コミュニケーションには「疑う」という行為が必要になります。会話の言葉を鵜呑みにしては、自分の価値観でしかその言葉の意味をはかれません。(中略)言葉の表面だけを信じるのは、相手を自分の思考の中に閉じ込めることと同じ(中略)ここでいう「疑う」は信頼する事の一部なのです。(P80)

「意味」とは、コミュニケーションのなかで変化し、生成されていくものである。語られる言葉の「意味」が複雑で不確かだからこそ、相手の言葉を注意深く聞き、そして想像を働かせなければならぬ。同時に、その複雑さや不確かさは、私たちの興味や思考をさらに深めさせてくれるきっかけにもなる。答えがひとつの会話は、その答えがでたところで終了する。ナビゲイターにとっては大切なこと、それはコミュニケーションを持続させるためのオープンエンドの問いかけ、オープンマインドの姿勢なのだ。

ACOPの授業では、後期に学生がナビゲイターとなって、学外から鑑賞者を招いて鑑賞会を開催する。その鑑賞会に、本年度は3名の方々を「観察者」としてお招きし、そこでの体験報告や分析をしていただいた(P17~36)。博物館での勤務を経て、現在は美術館で教育普及活動に従事する鈴木有紀氏は、自らの活動を振り返りながら、このような鑑賞方法で一番大切なのは、「『自分』ではなく目の前の『鑑賞者』そのもの」だと語る。動物園で日頃来園者と接する仕事をされている並木美砂子氏は、私の学生が一年間の最後に提出するレポートと、「鑑賞会」にボランティアとして参加して下さった鑑賞者たちに向けて実施したアンケートを比較、分析して下さった。そして博物館学を研究する平野智紀氏は、視聴覚教育やメディアリテラシーの分野における先攻研究を参照しながら、ACOPに参加した鑑賞者たちの「作品をみる」ことについて分析し、それがいかに「創造的な営み」であるかを記して下さった。

上記3氏以外にも、4年前にACOPを受講し、今年卒業したひとりの学生の卒業論文も本報告書に

掲載した。『対話をもたらすもの—ACOPにおける考察』(P177)と題された論文は、執筆者と同級生であったひとりの学生に注目し、その学生のACOP中の変化を、学生の言葉を分析しながら追ったものだ。筆者は論文の最後をこう締めくくっている。

「“自分”と“他者”との循環過程の中で行われる行為こそが対話であり、そしてその循環に終わりはない。『語られるべきことは常に残されている』のだ。」

一年を通じてACOPにどっぷりとつかっている私たちにとって、こうした外部からの分析や批判はとてもありがたい。

「ACOPを経験するまで、自分という人間をかたくなに守ってきた。自分はこうあるべきだと決めつけてきた。しかし、本番のナビゲーションでは(中略)自分を人に委ねることができたような気がする。」(P114)

この学生の言葉どおり、私たちも他者に身を委ね、そのなかでACOPそのものを見直す作業を今後とも続けていきたい。

(2) 基礎篇・年間活動経過

4月～5月

- ・プロジェクトの意義を理解するために、世界の美術館の成り立ちや現状、鑑賞教育を取り巻く状況、そしてなによりもアートとはなにかについて学ぶ。
- ・古典から現代アート、あるいは通常はアートとは思われていないアニメや報道写真など、多数の作品をスライドで投影し、クラス全員で話し合いながら鑑賞をしていく。授業のルールとして「一講一口」を設ける。これは授業中、必ず一度は自分の意見を述べるというルールである。

6月～7月

- ・作品と鑑賞者を結ぶ「ナビゲイター」となるために、鑑賞者へのアプローチの仕方やコミュニケーション・スキルを学ぶ。
- ・学生各自が好きな作品を選び、自らがナビゲイターとなってその作品を他の学生にみせ、話し合う。その後、初めてのナビゲイター体験の反省や感想を語りあい、それに基づいて新たな作品選びや練習を重ねる。

8月～9月

- ・学生がナビゲイターとなって行う後期の「鑑賞会」に、鑑賞者として参加していただくボランティアの方々を学内外で募る。
- ・学生は夏休みの間に、鑑賞者にみせるための作品を2点選び、それを選んだ理由を文章で提出する。夏休み中にその作品を使って、友人や家族を相手にナビゲーションの練習を始める。

10月

- ・ボランティア鑑賞者のための説明会を開催。
- ・学生を約10名ずつの2グループに分け、鑑賞会に向けた練習を開始。
- ・「週間報告」を開始。これは、学生の変化や悩みを把握するため、彼らに毎週、短い感想やコメントをメールで私に送ってもらうものである。「週間報告」開始当初は、100字程度の報告が届くが、日を追うにつれて文章は長くなり、内容も深く、興味深いものになる。
- ・学生は夏休み中に選んできた作品2点をクラス内で発表し、それらの作品が本プロジェクトに適切か否かを、皆で検討する。また、それらの作品について作者、様式、時代背景などさまざまな角度からの調査研究を重ねる。

- ・学生の意識を高めるため、そしてボランティアで協力してくださる鑑賞者の方々の期待に応えるため、すべての学生に「オーディション」を行う。これは、各自が選んだ作品で、他の学生を前にしてナビゲーションを行い、それに対して私が評価を与えるものである。オーディションで合格点をとらなければ、本番には「出演」できないというルールを作り、合格するまで練習を重ねる。オーディションにパスするために試行錯誤を重ねるなかで、学生たちは「どこがうまくいったのか、それはなぜか」あるいは、「どうすれば、もっとすばらしいナビゲーションができるようになるか」を各自、およびグループ毎に考えていく。その結果、学生同士が的確なアドバイスをし合うようになり、最終的には、彼ら自身がオーディションの「審査員」を務められるようになる。
- ・ACOP をすでに経験した上級生数名を「メンター」として、各グループにつける。私ひとりでは、学生が行うすべての自主練習（後期だけで、各グループ約 300 時間を超える）に参加できないからだ。また、学生にとって、教師である私にはなかなか言えないことでも先輩には話しやすく、彼らから適切なアドバイスを受けることもできる。

11 月～12 月

- ・鑑賞者ボランティアの方々を招き、対話型鑑賞会の実践を行う。プロジェクターで作品を投影し、学生がナビゲイトしながら鑑賞者みんなで作品について語ってもらう。その際、鑑賞者は「お客様」であるという意識を学生たちに徹底させる。鑑賞者は 2 グループに分かれており、それぞれ 2 週間に 1 度、約 2 時間半の鑑賞会を 3 回行う。

1 月

- ・学生は 1 年の活動を振り返り、アンケートおよびレポートを提出。

（3）実践篇

1 回生の必修授業を終えた上回生が、学内外で様々な実践活動を行っている。本年度に彼らが行った活動と、アート・コミュニケーション研究センターが主導したプロジェクトの報告を P153 以下にまとめた。

（4）謝辞

本年度も、地元・京都からはもちろんのこと、関東や中国地方からも多くの方にボランティアとして鑑賞会にご参加いただきました。過去 6 年間で、鑑賞者としてお越しいただいた皆様は延べ 800 名にも及びます。お客様への感謝の言葉として、「あなたがいないければ私はいません」(P76) と学生が書いています。大学 1 回生の彼らがこのような言葉を書けるようになったのも、ひとえに皆様のおかげです。

私はよく、本学科の名称を「アート・サバイバル学科」に変更しようと、半分冗談で、半分本気で学生たちに言うことがあります。「アートをツールとして、生き延びる術を学んでもらいたい」と思うからです。もちろんこの「生き延びる」は、「人を蹴落としてでも」という意味ではありません。人間はひとりでは生き延びられない生き物だからこそ、自分が生き延びるためには、他者にも生き延びてもらわなければならないのです。ACOP もコミュニケーションも、そして生きることそのものも、「あなたがいないければ私はいない」のです。

学年末のレポートで、別のある学生は以下のように述べています。

「見ず知らずの人同士が、絵を介して意見を出し合い、それを紡いでいき、ひとつの大きなコミュニ

ケーションの輪を作るという、なんとも不思議な場面に立ち合わせていただけたこと、本当にうれしく思います。」(P120)この言葉もまた、多くの学生が感じていることだと思います。コミュニケーションに終わりがないように、ACOP も続いていきます。どうかこれからもご協力いただけますよう、皆様よろしく願いいたします。

文末になりましたが、私たちに様々な実践や学びの場を与えてくださいました下記の皆様方にも心から御礼申し上げます。京都大学総合博物館、京都府立大学、島根県教育委員会浜田教育センター、大阪府立港南造形高等学校、横浜美術館、高知県立美術館、三重県立博物館、CAP House、日本パブテスト病院看護学校、野の花診療所。

最後に、私たちの活動と研究に対して、2009 年度から 3 年間、日本学術振興会より科学研究費をいただけることになりましたことを、ここに報告させていただきます。研究活動は、京都大学および甲南大学と共同で行ってまいります。

福 のり子

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科教授
アート・コミュニケーション研究センター代表

2010 年 5 月 31 日